



Title	近畿周辺部におけるアクセントの条件変化について : 類の分化が見られる徳島方言・三重方言を中心に
Author(s)	村田, 真実
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 23-34
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57302">https://doi.org/10.18910/57302</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 近畿周辺部におけるアクセントの条件変化について

— 類の分化が見られる徳島方言・三重方言を中心に —

村田 真実

**要旨** 金田一語類及び早稲田語類に示されている類と語群に準じ、同一類内でアクセントが分かれている現象、「類の分化」について考察した。類の分化が起こっている地域の現状をまとめ、アクセントの選ばれ方にどのような傾向があるのか検討した。フィールドワークによって得た音声データを分析した結果、類の分化は近畿周辺部、つまり京阪式アクセントと異体系アクセントが接触するところで起こっていること、当該地域のアクセントの条件変化には、1拍目と2拍目の母音の高さが主たる要因としてあり、そこに子音の有声性の有無が要因としてかぶさっていることを示唆した。

## 1 問題の在り処と用語の定義

### 1.1 問題の在り処

一つ一つの語が個別にアクセント変化を起こすのではなく、類ごとに一斉に変化するという事実は、秋永他(1997・1998)の文献アクセント史研究によって既に明らかになっている。『類聚名義抄』、『補忘記』、現代京都方言と近畿中央部のアクセントの通時変化を見てみると、アクセントとは類ごとに音調を変えていくものであり、同一類内の語で別の音調を持つということはまずないということが分かる。たとえば2拍名詞の「梅」(第一類)という語はいつの時代でも「竹」や「箱」などと同じアクセントを持ち、3拍五段動詞の「動く」(第二類)はいつの時代でも「余る」や「思う」などと同じアクセントを持つ。後者についていえば、3拍五段動詞第二類は『類聚名義抄』ではLLF(連体形はLLH)、『補忘記』ではHLL、現代京都方言ではHHHとなる。音調の変化は一斉に、類内の語すべてに影響を与える。以上のことから、同一類内の語が異なる音調で発音される語群に分化することは原則に反したものである。しかし、このような現象は現代語において、京阪式アクセントが話されている近畿周辺部でしばしば起こっている(上野 1987、松森他 2012、村田 2011、村田 2014)。本研究では、これを受けて徳島方言と三重方言の類の分化に対し、ロジスティック回帰分析を用いて分析を行ったMurata(2015)の解釈を再検討する。

### 1.2 用語の定義

高拍をH、低拍をLとして表記する。「類の分化」は筆者が定義した用語で、同一類内の語が、異なる音調で発音される語群に分化している状況を指す。

本稿で便宜上徳島方言と呼ぶものは、徳島県吉野川中流域で話されている方言を指す。

徳島県のアクセントは東側が「古色を湛える」(金田一 1974)京阪式アクセントであり、吉野川中流域は、讃岐式アクセント池田型と京阪式アクセント徳島型の接触地帯である(岸江他 2010、岸江・村田 2012)。池田型は2拍名詞の統合状況が4(1・3/2/4/5)となっているアクセント体系を指す。徳島型は2拍名詞の統合状況が4(1/2・3/4/5)となっているアクセント体系を指す。音調は表1の通りで、本稿で徳島方言と呼ぶものには、2拍名詞第三類に類の分化が見られ、第三類は語によってHHが出たり、HLが出たりする。これについては村田(2014)で報告済みである。

本稿で便宜上三重方言と呼ぶものは、三重県旧度会郡紀勢町錦で話されている方言である。三重県のアクセントは、揖斐川を境に西側は京阪式アクセント、東側は東京式アクセント(内輪)が聞かれる。錦は揖斐川より西にあり、海に面した集落である。京阪式アクセントは2拍名詞の統合状況が4(1/2・3/4/5)となっているアクセント体系を指す。東京式アクセント(内輪)は2拍名詞の統合状況が3(1/2・3/4・5)となっているアクセント体系を指す。それぞれの音調については表2の通りである。北牟婁・南牟婁方言はまた別の特殊なアクセントが聞かれる。三重県のアクセントの概要及び特徴は、服部(1930)や上野(1987)に詳しい。本稿で三重方言と呼ぶものには、2拍名詞第四類と第五類に類の分化が見られる。二つの類は統合されており、語によってLHが出たり、HLが出たりする。錦は揖斐川から離れたところにあり、異体系アクセントが接触する境界地帯ではないが、京阪式アクセントと東京式アクセント(内輪)が混じったような類の分化を起こしている。

表1 池田型と徳島型の2拍名詞の音調

	池田型	徳島型
第一類	HH-H (HH)	HH-H (HH)
第二類	HL-L (HL)	HL-L (HL)
第三類	HH-H (HH)	HL-L (HL)
第四類	LL-H (LH)	LL-H (LH)
第五類	LH-L (LH)	LH-L (LH)

表2 京阪式アクセントと東京式アクセント(内輪)の2拍名詞の音調

	京阪式アクセント	東京式アクセント(内輪)
第一類	HH-H (HH)	LH-H (LH)
第二類	HL-L (HL)	LH-L (LH)
第三類	HL-L (HL)	LH-L (LH)
第四類	LL-H (LH)	HL-L (HL)
第五類	LH-L (LH)	HL-L (HL)

## 2 先行研究

### 2.1 徳島方言の類の分化

徳島方言の類の分化を報告したもので最も古いものに、加藤(1968)がある。加藤(1968)では、吉野川中流域において異体系アクセントが接触する境界地帯<sup>1</sup>のアクセントの状況を報告したものである。加藤(1968)は、吉野川中流域のアクセント境界地帯で調査を行い、2拍名詞第三類のアクセントについて、同一類内に所属する語が音調の点で分裂を起こしていると述べている。また、分裂の仕方について、音韻面からも文法的性格からも説明がつかないと明記している。村田(2014)では、加藤(1968)を受けて2009年に当該地域の調査を行い、そこで得たデータに基づき、統計手法を用いて音節構造が要因となっていることを示した。

### 2.2 三重方言の類の分化

上野(1987)では、三重県旧度会郡紀勢町錦の2拍名詞第四類・第五類で類の分化が起こっていることが報告されている。これは生田(1951)で報告されたデータを基に、他の研究者(金田一春彦氏・山口幸洋氏・徳川宗賢氏)のデータを加えて解釈を試みたもので、類の分化が生じた原因について3つの仮説を立てている。しかし、その仮説はデータから見た「推論・推測にすぎない」として、結論を出すことは避けている。

村田(2011)では、三重県志摩市の3拍名詞について、第二類と第六類で類の分化が起こっていることを報告した。これは志摩市の沿岸部10地点で49名(2010年時点で65歳以上)に対して調査を行ったもので、3拍名詞の統合状況は $5(1 \cdot 6y / 2x \cdot 7 / 2y \cdot 4 / 3 \cdot 5 / 6x)$ であった。しかし、この報告は調査結果の記述と変化の方向を推考するのみで、類の分化が生じた原因や、それにかかる要因については分析していない。

Murata(2015)では、上野(1987)を受けて、2015年に三重県旧度会郡紀勢町錦で行った調査結果をもとに、類の分化の要因を分析した。Murata(2015)では、類の分化が起こっている類でどのような音調が選ばれるかは、音節構造が要因となっていること示唆した。

### 2.3 その他の方言の類の分化

松森他(2012)によると、垂井式アクセント<sup>2</sup>の分布地域である富山方言では、2拍名詞第三類に類の分化が起こっていること、そしてどちらのアクセントが選ばれるかに影響を与える条件は、2拍目の母音の高さと、2拍目が特殊拍であるか否かという点にあると解説されている。

## 3 グラフによる傾向分析

統計手法による分析を行う前に、グラフから傾向を分析する。Murata(2015)では、音節構造や、子音や母音の性質がアクセントに影響を与えていると示唆した。本稿では、Murata(2015)の結果を踏まえ、更に細かく、どのような条件がアクセントに影響を与え得

るのか検討を行う。用いたデータは稿者がフィールドワークで得たデータで、Murata(2015)で用いたものと同じである(付録1参照)。徳島方言の話者は、伝統方言を保持していると考えられる60歳以上(2009年調査当時)、吉野川中流域生え抜きの男女16名で、調査語は第三類に分類される語の内よく使われているだろうと思われる38語である。三重方言話者は、伝統方言を保持していると考えられる65歳以上(2015年調査当時)、錦の生え抜きの男女16名で、調査語は第四類と第五類に分類される語の内よく使われているだろうと思われる49語である。

### 3.1 徳島方言

徳島方言では、V1とV2の母音の高さが影響していることに加え、C1が有声子音であるか否かが、2つのアクセントのどちらが実現するかを決める要因であると考えられる。

図1は、徳島方言の語について、係数を式に代入し、その総和の順に並べたものである(具体的な係数については付録2を参照)。ロジスティック回帰分析から得た総和をグラフ化してみると、「舌」より左の語彙の総和はマイナス、「家」より右の語彙は総和がプラスとなっており、総和がマイナスの語はHHが、総和がプラスの語はHLが出やすいという傾向が見て取れる。

図2はアクセントの実現率とC1の有声性の有無を示したもので、太い実線で囲んだ単語はC1が有声子音である単語である。

図3はアクセントの実現率とV2の高さ、C1の有声性の有無の関係をあらわしたグラフで、太い実線で囲んだ単語はC1が有声子音である単語である。V2が非高母音であり、加えてC1に有声性がなければ(子音なしか無声子音)ならHHになりやすい。

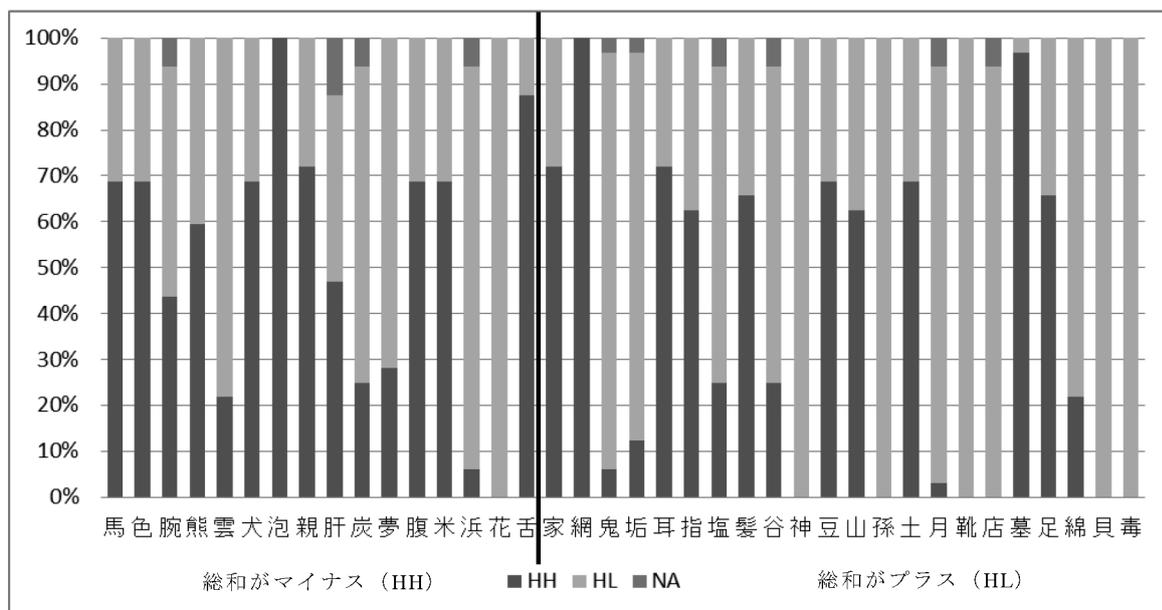


図1 総和の順に並べた語群(徳島方言)

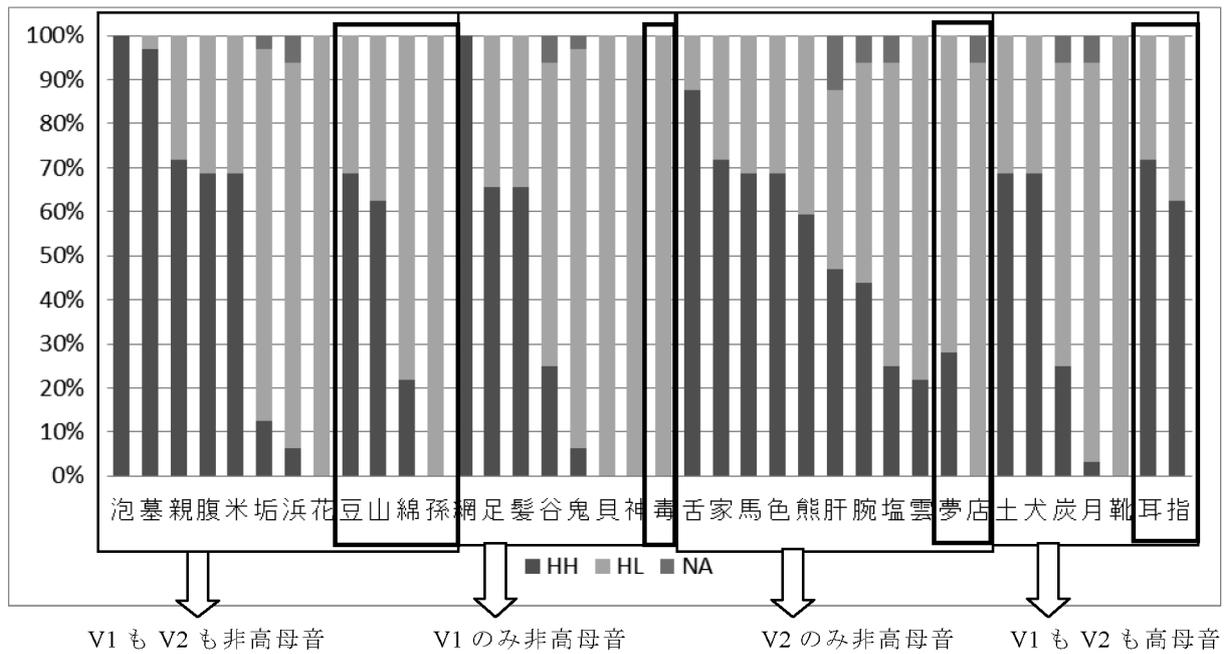


図2 アクセントの実現率とC1の有声性の有無（徳島方言）

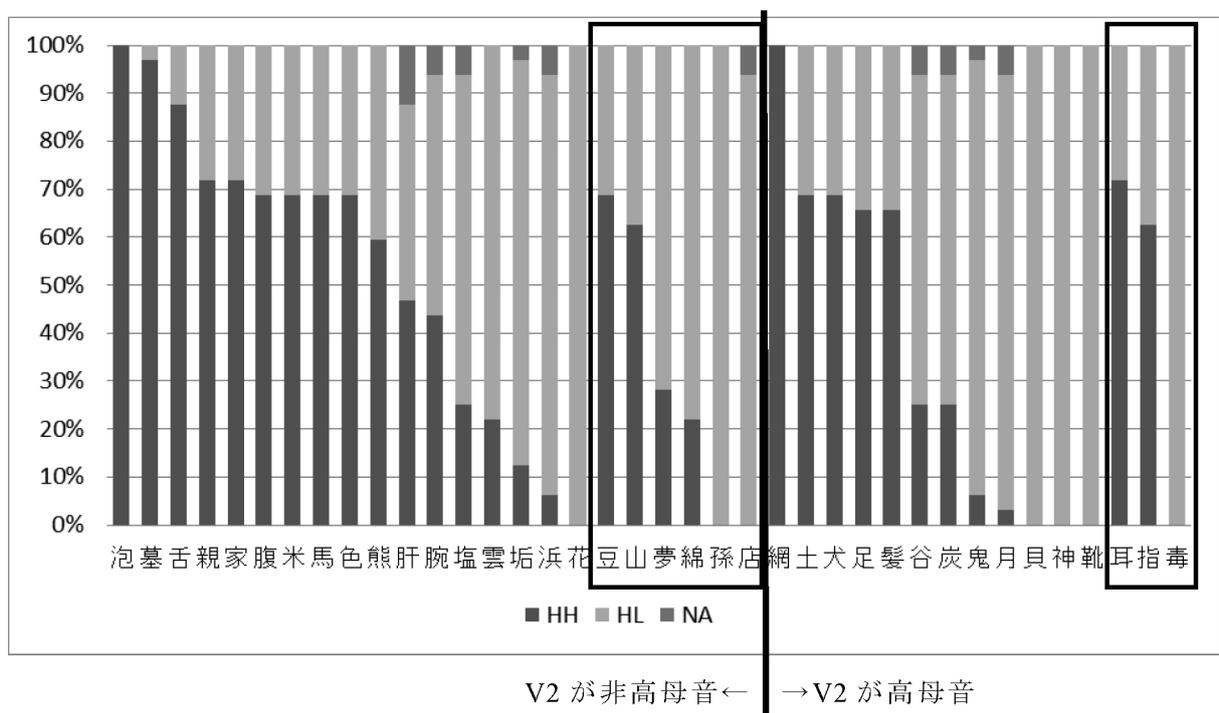


図3 アクセントの実現率とV2の高さ、C1の有声性の有無（徳島方言）

### 3.2 三重方言

V1 と V2 の母音の高さが影響していることに加え、C1 と C2 が有声子音であるかどうか、アクセントを選ぶ際の鍵になっていると考えられる。図 4 は、三重方言の語について、係数を式に代入し、その総和の順に並べたものである（具体的な係数については付録 2 を参照）。ロジスティック回帰分析から得た係数をグラフ化してみると、「秋」より左の語彙は総和がマイナス、「雨」より右の語彙は総和がプラスとなっており、総和がマイナスの語は LH が、総和がプラスの語は HL が出やすいという傾向が見て取れる。

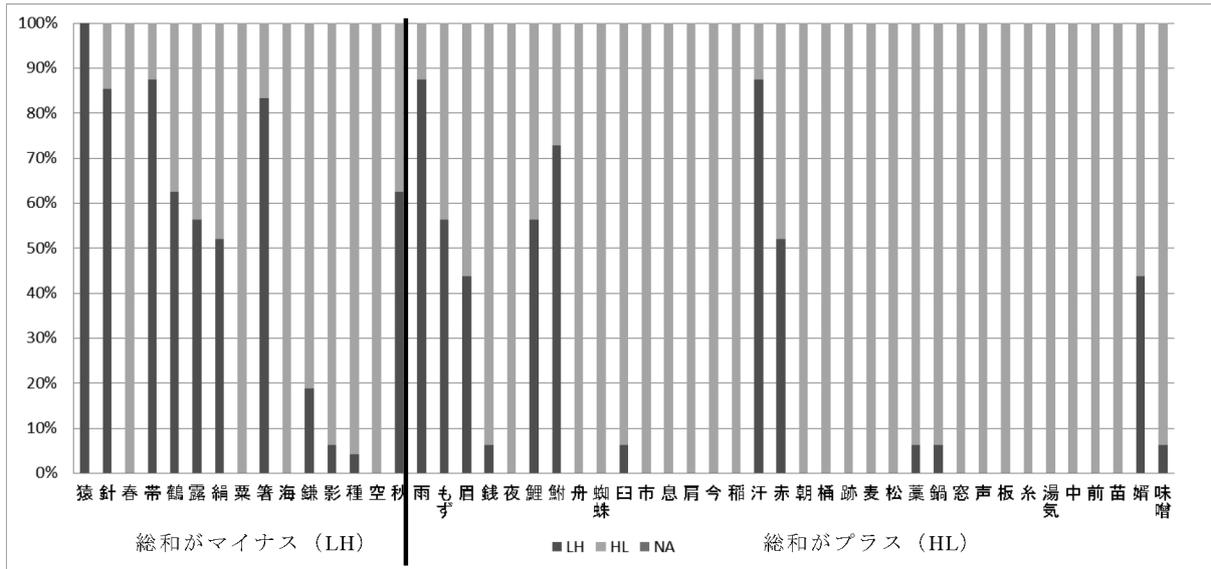


図 4 総和の順に並べた語群（三重方言）

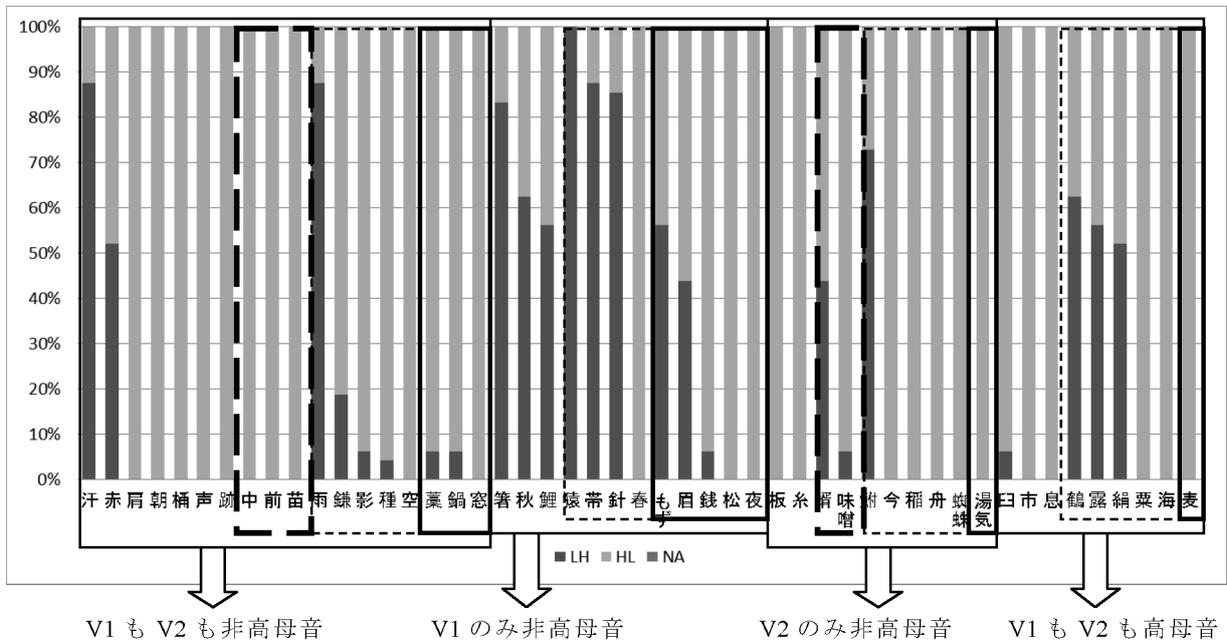


図 5 アクセントの実現率と C1 と C2 の有声性の有無（三重方言）

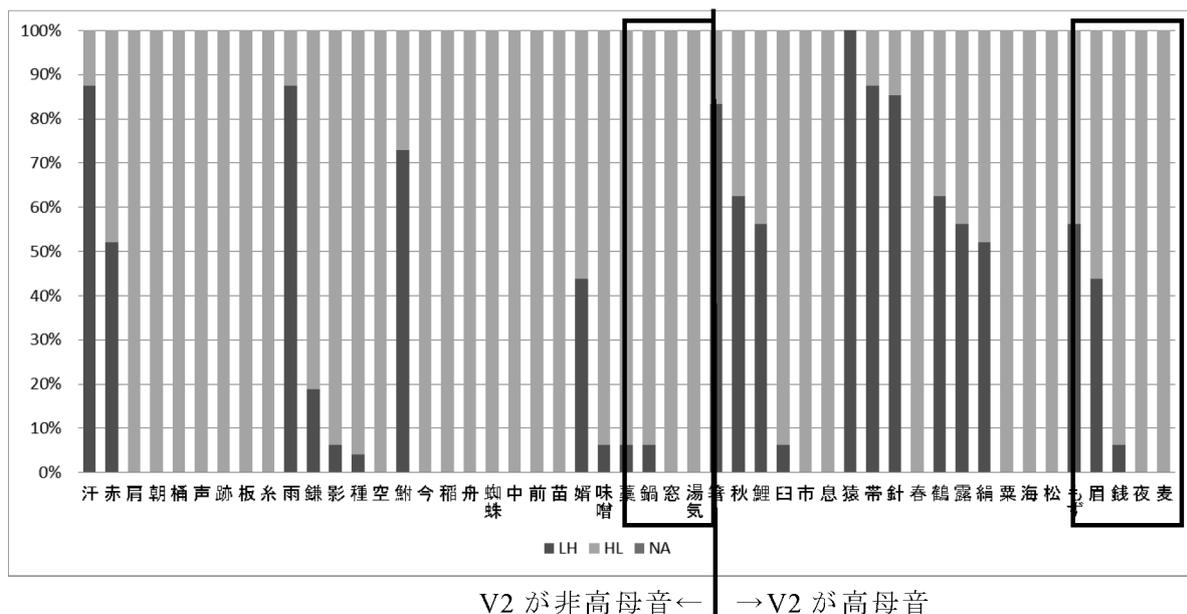


図 6 アクセントの実現率と V2 の高さ、C1 と C2 の有声性の有無（三重方言）

図 5 はアクセントの実現率と C1 と C2 の有声性の有無を示したもので、太い破線で囲んだ単語は C1 のみ有声子音、細い破線で囲んだ単語は C2 のみ有声子音、太い実線で囲んだ単語は C1 も C2 も有声子音である単語である。

図 6 はアクセントの実現率と V2 の高さ、C1 と C2 の有声性の有無の関係をあらわしたグラフで、太い実線で囲んだ単語は C1 と C2 が有声子音の単語である。V2 が非高母音であり、加えて C1 と C2 に有声性がなければ（子音なしか無声子音）なら LH になりやすい。

#### 4 ロジスティック回帰分析を用いた検証

上記のグラフから傾向を分析し、類の分化の要因について以下の仮説<sup>3</sup>を立て、ロジスティック回帰分析によりそれを検証した。

一般化線型モデルとして、目的変数にアクセントのロジットを、説明変数に子音と母音の構成を指定した。説明変数については、以下の通りである。

- 1 拍目の子音(C1)：子音なし、無声子音あり、有声子音ありの 3 パターン
- 1 拍目の母音(V1)：非高母音 (a,e,o) か高母音 (i,u) かの 2 パターン。
- 2 拍目の子音(C2)：子音なし、無声子音あり、有声子音ありの 3 パターン
- 2 拍目の母音(V2)：非高母音 (a,e,o) か高母音 (i,u) かの 2 パターン。

その結果、それぞれの方言について、以下の傾向が示唆された。

徳島方言の類の分化に影響を与えているものと影響の強さ

V1 が非高母音 = V2 が非高母音 > C1 が有声子音 > C2 が有声子音

計算上、最も HH になりやすい音節構造

C1 が子音なし + V1 が高母音 + C2 が有声子音 + V2 が非高母音 「腕・色・馬」など

計算上、最も HL になりやすい音節構造

C1 が有声子音 + V1 が非高母音 + C2 が子音なし + V2 が高母音 該当なし

該当する単語があるパターンで、最も HL になりやすい音節構造

C1 が無声子音 + V1 が非高母音 + C2 が子音なし + V2 が高母音 「貝」など

三重方言の類の分化に影響を与えているものと影響の強さ

V1 が非高母音 = V2 が非高母音 = C1 が有声子音 = C2 が有声子音 > C2 が無声子音

計算上、最も LH になりやすい音節構造

C1 が無声子音 + V1 が非高母音 + C2 が有声子音 + V2 が高母音 「猿、針、春」など

計算上、最も HL になりやすい音節構造

C1 が有声子音 + V1 が高母音 + C2 が子音なし + V2 が非高母音 該当なし

該当する単語があるパターンで、最も HL になりやすい音節構造

C1 が有声子音 + V1 が高母音 + C2 が有声子音 + V2 が非高母音 「湯気」など

## 5 結論

本稿では、徳島方言と三重方言の類の分化について、現状がどうなっているか、そして類の分化はどのような条件により、どのように分化するのかを説明した。両方言では、1拍目と2拍目の母音の高さが最も強い要因としてあり、そこに子音の有声性の有無がかぶさって分化を起こしていることが傾向として分かった。母音の高さがアクセントの条件変化に大きな影響を与えることは富山方言の先行研究に矛盾しない。母音の高さのみで解釈出来ないアクセントの条件変化は、子音が「有声子音である」か否かである程度説明が可能である。つまり、子音の有声性はアクセントに影響を与え得ることが分かった。

条件変化の積み重ねとして日本語のアクセントの変化があるとしたら、『類聚名義抄』、『補忘記』、現代京都方言と近畿中央部のアクセントの通時変化についても、同じように傾向を分析できるだろう。現存する方言の条件変化と、アクセント史から読み取れる通時変化に一致するところが見つけられたら面白いと思う。これについては、別稿に譲る。

## 付記

本研究は、International Congress of Phonetic Sciences(ICPhS2015)でポスター発表を行った際に用いたデータを再分析し、加筆修正したものである。

## 謝辞

ご協力くださった徳島方言話者、三重県方言話者の方々、そして話者の方々への仲介をしてくださった各自治体及び担当者の方に心より感謝申し上げます。大紀町の担当者の方は、貴重な郷土資料である『ふるさと錦』（奥野清見著、1989年、新潮社）をお貸しくいただきました。重ねて御礼申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 26370449 の助成を受けたものです。

## 引用文献

- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊(1997)『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版.
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊(1998)『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版.
- 生田早苗(1951)「近畿アクセント圏境界地区の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局
- 上野善道(1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42-1, 日本学士院.
- 岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実(2010)『徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告(2)—』徳島大学国語学研究室.
- 岸江信介・村田真実(2012)「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』第16巻第3号, 34-46.
- 加藤信昭(1968)「境界地帯におけるアクセントの問題—吉野川流域を中心として—」日本方言研究会第6回発表原稿集
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法—』塙書房.
- 服部四郎(1930)「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』第3号 (柴田武・加藤正信・徳川宗賢編(1978)『日本の言語学6 方言』大修館書店.に再録)
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古(2012)『日本語アクセント入門』三省堂
- 村田真実(2011)「志摩市のアクセント」『三重県志摩市のことば』徳島大学日本語学研究室, 222-294.
- 村田真実(2014)『統計手法を用いた諸方言アクセント分類の実証的研究—京阪式アクセントと讃岐式アクセントを中心に—』(徳島大学博士論文)
- Murata, Mami (2015) "A Logistic Regression Approach to Accent Class Division in Japanese Dialects: with Special Reference to the Keihan-Type Accent System in Peripheral Kinki Regions", International Congress of Phonetic Sciences(ICPhS), Glasgow, UK. [Poster]

付録1 2拍名詞第三類の類の分化（実数）

徳島方言 (n=32)

三重方言 (n=48)

word	c1	v1	c2	v2	HH	HL	NA
泡		a	w	a	32	0	0
網		a	m	i	32	0	0
墓	h	a	k	a	31	1	0
舌	s	i	t	a	28	4	0
親		o	y	a	23	9	0
家		i		e	23	9	0
耳	m	i	m	i	23	9	0
腹	h	a	r	a	22	10	0
馬		u	m	a	22	10	0
豆	m	a	m	e	22	10	0
米	k	o	m	e	22	10	0
土	t	u	t	i	22	10	0
色		i	r	o	22	10	0
犬		i	n	u	22	10	0
足		a	s	i	21	11	0
髪	k	a	m	i	21	11	0
山	y	a	m	a	20	12	0
指	y	u	b	i	20	12	0
熊	k	u	m	a	19	13	0
肝	k	i	m	o	15	13	4
腕		u	d	e	14	16	2
夢	y	u	m	e	9	23	0
谷	t	a	n	i	8	22	2
炭	s	u	m	i	8	22	2
塩	s	i		o	8	22	2
綿	w	a	t	a	7	25	0
雲	k	u	m	o	7	25	0
垢		a	k	a	4	27	1
浜	h	a	m	a	2	28	2
鬼		o	n	i	2	29	1
月	t	u	k	i	1	29	2
花	h	a	n	a	0	32	0
店	m	i	s	e	0	32	2
貝	k	a		i	0	32	0
神	k	a	m	i	0	32	0
孫	m	a	g	o	0	32	0
毒	d	o	k	u	0	32	0
靴	k	u	t	u	0	32	0

word	c1	v1	c2	v2	LH	HL	NA
猿	s	a	r	u	48	0	0
雨		a	m	e	42	6	0
汗		a	s	e	42	6	0
帯		o	b	i	42	6	0
針	h	a	r	i	41	7	0
箸	h	a	s	i	40	8	0
鮎	f	u	n	a	35	13	0
秋		a	k	i	30	18	0
鶴	t	u	r	u	30	18	0
鯉	k	o		i	27	21	0
もず	m	o	z	u	27	21	0
露	t	u	y	u	27	21	0
赤		a	k	a	25	23	0
絹	k	i	n	u	25	23	0
婿	m	u	k	o	21	27	0
眉	m	a	y	u	21	27	0
鎌	k	a	m	a	9	39	0
藁	w	a	r	a	3	45	0
影	k	a	g	e	3	45	0
鍋	n	a	b	e	3	45	0
銭	z	e	n	i	3	45	0
味噌	m	i	s	o	3	45	0
臼		u	s	u	3	45	0
種	t	a	n	e	2	46	0
肩	k	a	t	a	0	48	0
中	n	a	k	a	0	48	0
朝		a	s	a	0	48	0
今		i	m	a	0	48	0
板		i	t	a	0	48	0
空	s	o	r	a	0	48	0
前	m	a		e	0	48	0
苗	n	a		e	0	48	0
稲		i	n	e	0	48	0
桶		o	k	e	0	48	0
声	k	o		e	0	48	0
舟	f	u	n	e	0	48	0
湯気	y	u	g	e	0	48	0
市		i	t	i	0	48	0
息		i	k	i	0	48	0
粟	k	u	r	i	0	48	0
海		u	m	i	0	48	0
麦	m	u	g	i	0	48	0
跡		a	t	o	0	48	0
窓	m	a	d	o	0	48	0
糸		i	t	o	0	48	0
蜘蛛	k	u	m	o	0	48	0
春	h	a	r	u	0	48	0
松	m	a	t	u	0	48	0
夜	y	o	r	u	0	48	0

付録2 ロジスティック回帰分析から得た係数

- C11・・・C1が無声子音であるときの係数
- C12・・・C1が有声子音であるときの係数
- V11・・・V1が非高母音であるときの係数
- C21・・・C2が無声子音であるときの係数
- C22・・・C2が有声子音であるときの係数
- V21・・・V2が非高母音であるときの係数

総和が、プラスなら1が出やすく、マイナスなら0が出やすい。

徳島方言

word	Intercept	c1	v1	c2	v2	合計
泡	0.7966	0	0.6595	-1.2476	-0.5959	-0.3874
網	0.7966	0	0.6595	-1.2476	0	0.2085
墓	0.7966	0.2494	0.6595	-0.5161	-0.5959	0.5935
舌	0.7966	0.2494	0	-0.5161	-0.5959	-0.066
親	0.7966	0	0.6595	-1.2476	-0.5959	-0.3874
家	0.7966	0	0	0	-0.5959	0.2007
耳	0.7966	0.886	0	-1.2476	0	0.435
腹	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	-0.5959	-0.138
馬	0.7966	0	0	-1.2476	-0.5959	-1.0469
豆	0.7966	0.886	0.6595	-1.2476	-0.5959	0.4986
米	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	-0.5959	-0.138
土	0.7966	0.2494	0	-0.5161	0	0.5299
色	0.7966	0	0	-1.2476	-0.5959	-1.0469
犬	0.7966	0	0	-1.2476	0	-0.451
足	0.7966	0	0.6595	-0.5161	0	0.94
髪	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	0	0.4579
山	0.7966	0.886	0.6595	-1.2476	-0.5959	0.4986
指	0.7966	0.886	0	-1.2476	0	0.435
熊	0.7966	0.2494	0	-1.2476	-0.5959	-0.7975
肝	0.7966	0.2494	0	-1.2476	0	-0.2016
腕	0.7966	0	0	-1.2476	-0.5959	-1.0469
夢	0.7966	0.886	0	-1.2476	-0.5959	-0.1609
谷	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	0	0.4579
炭	0.7966	0.2494	0	-1.2476	0	-0.2016
塩	0.7966	0.2494	0	0	-0.5959	0.4501
綿	0.7966	0.886	0.6595	-0.5161	-0.5959	1.2301
雲	0.7966	0.2494	0	-1.2476	-0.5959	-0.7975
垢	0.7966	0	0.6595	-0.5161	-0.5959	0.3441
浜	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	-0.5959	-0.138
鬼	0.7966	0	0.6595	-1.2476	0	0.2085
月	0.7966	0.2494	0	-0.5161	0	0.5299
花	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	-0.5959	-0.138
店	0.7966	0.886	0	-0.5161	-0.5959	0.5706
貝	0.7966	0.2494	0.6595	0	0	1.7055
神	0.7966	0.2494	0.6595	-1.2476	0	0.4579
孫	0.7966	0.886	0.6595	-1.2476	-0.5959	0.4986
毒	0.7966	0.886	0.6595	-0.5161	0	1.826
靴	0.7966	0.2494	0	-0.5161	0	0.5299

	係数
C11	0.2494
C12	0.886
V11	0.6595
C21	-0.5161
C22	-1.2476
V21	-0.5959

	accent
0	HH
1	HL

三重方言

word	intercept	c1	v1	c2	v2	合計
猿	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	0	-1.244
雨	1.7936	0	-0.9524	-1.8586	1.384	0.3666
汗	1.7936	0	-0.9524	-0.6896	1.384	1.5356
帯	1.7936	0	-0.9524	-1.8586	0	-1.0174
針	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	0	-1.244
箸	1.7936	-0.2266	-0.9524	-0.6896	0	-0.075
鮒	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	1.384	1.0924
秋	1.7936	0	-0.9524	-0.6896	0	0.1516
鶴	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	0	-0.2916
鯉	1.7936	-0.2266	-0.9524	0	0	0.6146
もず	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	0	0.593
露	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	0	-0.2916
赤	1.7936	0	-0.9524	-0.6896	1.384	1.5356
絹	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	0	-0.2916
婿	1.7936	1.6104	0	-0.6896	1.384	4.0984
眉	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	0	0.593
鎌	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	1.384	0.14
葉	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	1.384	1.977
影	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	1.384	0.14
鍋	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	1.384	1.977
銭	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	0	0.593
味噌	1.7936	1.6104	0	-0.6896	1.384	4.0984
臼	1.7936	0	0	-0.6896	0	1.104
種	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	1.384	0.14
肩	1.7936	-0.2266	-0.9524	-0.6896	1.384	1.309
中	1.7936	1.6104	-0.9524	-0.6896	1.384	3.146
朝	1.7936	0	-0.9524	-0.6896	1.384	1.5356
今	1.7936	0	0	-1.8586	1.384	1.319
板	1.7936	0	0	-0.6896	1.384	2.488
空	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	1.384	0.14
前	1.7936	1.6104	-0.9524	0	1.384	3.8356
苗	1.7936	1.6104	-0.9524	0	1.384	3.8356
稲	1.7936	0	0	-1.8586	1.384	1.319
桶	1.7936	0	-0.9524	-0.6896	1.384	1.5356
声	1.7936	-0.2266	-0.9524	0	1.384	1.9986
舟	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	1.384	1.0924
湯気	1.7936	1.6104	0	-1.8586	1.384	2.9294
市	1.7936	0	0	-0.6896	0	1.104
息	1.7936	0	0	-0.6896	0	1.104
粟	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	0	-0.2916
海	1.7936	0	0	-1.8586	0	-0.065
麦	1.7936	1.6104	0	-1.8586	0	1.5454
跡	1.7936	0	-0.9524	-0.6896	1.384	1.5356
窓	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	1.384	1.977
糸	1.7936	0	0	-0.6896	1.384	2.488
蜘蛛	1.7936	-0.2266	0	-1.8586	1.384	1.0924
春	1.7936	-0.2266	-0.9524	-1.8586	0	-1.244
松	1.7936	1.6104	-0.9524	-0.6896	0	1.762
夜	1.7936	1.6104	-0.9524	-1.8586	0	0.593

	係数
C11	-0.2266
C12	1.6104
V11	-0.9524
C21	-0.6896
C22	-1.8586
V21	1.384

	accent
0	LH
1	HL

- 1 県東部に京阪式アクセント、県西部に讃岐式アクセントが広がっており、吉野川中流域は接触地帯にあたる。
- 2 垂井式アクセントは、東京式アクセントと京阪式アクセントの接触する部分で見られることが多いため、異体系アクセントが接触した際に生じた条件変化が体系化したものではないかと考えられるか。
- 3 徳島方言は1語につき2回、三重方言は1語につき3回ずつ発音されたものをカウントしているが、今回被験者（話者）の反応は独立であると仮定する。